

サポートアイテム職人出久くん

トロント

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

緑谷出久がヒーローを諦めてサポートアイテム職人の道を進むI
Fです

かつちゃんが驚くほどにマイルド

目次

N o .	1	彼は天才サポートアイテム職人	1
N o .	2	火力は正義の味方だが正義は火力の味方ではない	4
N o .	3	英雄というもの	7
N o .	4	最強の2人 最高の2人	12
N o .	5	雪だるま式苦勞人	15
N o .	6	先生の心生徒に知らせず	20
N o .	7	新芽は風雨にさらされてまつすぐに育つ	26
N o .	8	特別な訓練と書いて特訓	29
N o .	9	偉大なる実験動物	33
N o .	10	狂気と狂気は引かれ合う	37

No. 1 彼は天才サポートアイテム職人

お前ムコセーのデクな!!

そうだよ…ボクは無個性だよ…

無個性のクセにヒーローになんかなれるわけねえだろが!!

そうだね、ヒーローになんかならないよ

俺は将来プロヒーローになって高額納税者番付に名を連ねるのさ

!

よし、それなら

「かっちゃん、今回の籠手はどうだった？」

「悪くねえが、少し軽すぎるな」

「じゃあ手首にウエイト増やしておくよ？」

「いっそ全体的にプラス4キロくらい欲しいな、叩きつけた時の威力が不安だ」

「うーん、あまり殺傷力あげるのはまずいと思うよ？」

「いーんだよその辺は調整するから、死なねえ程度にこつちが調整すれば良い」

「あ、それと火炎瓶用のボトルの追加ね」

「おう、お前も受験の準備あんに悪りいな」

「何言ってるんの、こういう経験がボクには大事なんだよ」

「…まあお前の頭なら不安もねえか」

「さて…受験日まで一年切ってるしその日までにしっかりと調整させてもらうよ未来のNo. 1ヒーローさん」

ボクはこの最強のヒーロー候補の最強のサポートアイテム職人になろうと決めたのだった。

………

俺は爆豪勝己、現在中学三年生だ。

今は朝のホームルームの時間、教師が進路希望調査のプリントを配っていた

「さて、今から進路希望のプリントを配るけど…まあみんなヒーロー科だよな？」

その言葉を皮切りに教室が一気に沸き立つ、クラスメイトのほぼ全員が個性を使う

「うん、みんないい個性だ、でも校内では原則として個性の使用は禁止な」

…聞き捨てならない言葉が飛び出る、少し分からせてやるか

「皆とか一緒くたにするなよセンサー、俺『ら』はこんな連中と仲良く底辺にはいかねー…」

「あー、爆豪と緑谷は雄英志望だったか…」

そう言った瞬間、クラス中がざわざわと輪をかけて騒がしくなる

「国立の!?今年偏差値79だぞ!?」

「倍率も毎度やべーんだろ!?」

「そのざわざわがためーらの限界だ!!」

俺はあのオールマイトをも超えてトップヒーローとなり!必ずや高額納税者ランキングに名を刻むのさ!!そして!!」

教室の隅で寝息を立てる幼馴染を指差して

「そこの緑谷出久は将来プロのサポートアイテム職人となり!!特許料とアイテムの利益で億万長者となる!!そしてそれを身にまとうのは…俺だ!!」

「あー…まあそういうことだ、お前らも負けんなよー…」

なんだこの教師、ヤル気あんのか?

……

そして放課後

「かつちゃん!!」

「どーした?出久」

帰り支度をしていると出久がスマホ片手に話しかけてきた

「みてよこれ!!今朝の事件!!ニュースサイトのトップページにある!!」

「いやなんだよ今朝の事件って」

「新人ヒーローのデビュー戦だよ!!M t. レディっていう、巨大化の個性を持ったヒーローだよ!すごいなあ…この個性ならどんなに巨大な物も振り回せるし災害救助にも素早く対応できる!コス

チュームは伸縮自在が前提だけど、そうだなあ…この巨体とビジュアルで重火器をぶっ放したらかなり絵になると思わない？」

「ブツブツウルセエ」

「そんなバツサリ言わなくても!!」

「出久、この後時間あるか？」

ゲーセンにでも付き合えよ、新しい装備のヒントになんたる？」

俺はあのオールマイトを超えてN.O. 1ヒーローになる

そしてこいつもN.O. 1のサポートアイテム職人になる

俺とコイツの道にきつと敵はいねえ…

No. 2 火力は正義の味方だが正義は火力の味方ではない

雄英高校の受験から帰るとかつちゃんから電話がきた、多分受験のことでの話だろう

「もしもし?どうしたのかつちゃん」

「出久、怒らないから答えろ」

なんだろ? 籠手の機能に不備があったのかな? 前日のメンテでは特に問題は見られなかったが実戦での使用感がイマイチだったか?

「二トロの圧縮機構をつけたのは前日のメンテだな?」

「あー…」

何かと思えばあれか、前日のメンテで思いついたらままなんとなく実装した二トロ圧縮レバー、あれは会心の出来だった

「もしかして使う機会があった? それならもう少し気合い入れて調整を」

「やり過ぎだバカ!! 高層ビルごと山みてえなロボットが木っ端微塵だ! 最大火力で撃たなかったからまだマシだったが最大火力でぶっ放してたら確実に死人が出る威力だったぞ!!」

「でも五体満足なあたり流石だね」

「反省の色すら見せねえな… まあ結果的にあの女子は助かったみたいだから怒らねえよ」

「籠手の硬さはどうだった? ていうかヒーロー科の試験ってどんなのだったの? 山みたいなロボットつてもしかしてロボ・インフェルノ? てことはロボットとの市街地戦? あと」

「ウルセエー! いっぺんにまくし立てるな!」

息を落ち着かせてかつちゃんはボクの問いに1つづつ答えてくれた

「籠手の硬さは問題ない、鉄製のロボットブン殴ってもビクともしねえ、このままヒーロー課の授業にも持ち込める、試験内容はロボットをヴィランに見立てた市街地実習、ロボ・インフェルノだった… 出

久」

「何？かつちゃん」

「今まで本当にありがとう、あとこれからも頼む」

「うん、ていうかナチュラルにボクも受かつてる前提なんだね」

「当たり前だろ、お前で受からなかったら俺も受かつてねえよ、じゃあ切るぞ」

「うん、また明日学校で」

電話を切ってスマホを充電器に戻す、今からやることは山ほどある「まずはかつちゃんのヒーロースーツに使う素材を決めないと…」

安心してよかつちゃん、君を最高最強のヒーローにしてみせる。

……………

「どうした天哉？いつも以上に難しい顔になってんぞ？」

「兄さん…僕は…このままヒーローになっても良いのだろうか…」

「…なにやらやけに深刻そうだな…話してみろ」

「雄英高校の入学試験…あれは受験生のヒーローとしての適正を図るのが目的だったんだと思う…」

「うん、それで？」

「あの時…僕はあのOPヴィランを無視して逃げてしまった…瓦礫の下に別の受験生がいることにも…気づいていた！なのに僕は試験に合格することしか考えていなかった！こんなことではヒーローになっても兄さんのようには…」

「天哉、なにも気にすることはないさ」

お前がヒーローになるまでにはまだまだ時間がある、それまでにしっかりとヒーローとしての心構えをしていけばいいんだ」

「…ありがとう兄さん…結局愚痴みたいになってしまったね…」

「なーにヒーローである以前にお前の兄さんなんだ、何かあったらいつでも相談に乗るさ…じゃあそろそろ行ってくる」

「もう夜だよ？サイドキックに任せた方が…」

「そんなこと言ってられないさ、今の話を聞いたら余計にな！しっかりと見とけよ、ヒーローインゲニウムの活躍をな！」

「ああ、兄さん、いつてらっしやい！」

「ああ！行つてきます!!」

そうして僕は兄を夜の街へ見送った

あの時、試験でO pヴィランを破壊したあの受験生はきつと試験に合格したことだろう

「…また、彼と会いたいな…」

そんなことを考えて夜は更けていくのだった

N O. 3 英雄というもの

「この基盤はまだ使える……こっちの歯車は錆を落として……いや面倒だから溶かして重りにでも使うかなあ……あれ？花火の残りかな？火薬はまだ湿気てない！よし！さつそく回収しないと！」

僕は今近所の海岸に来ていた、ここは多くの不法投棄物の溜まり場で、僕にとってはまさに鉱脈、あるいは宝石箱のようだった。

「冷蔵庫は分解してプラスチックを溶かして……こ、これは軽自動車!!こんなのものであるなんて今日はなんてツイてるんだ!!さつそくバラして色々取り出さないと！」

「へい……そんな少年！」

テンションが最高潮の時に後ろから声をかけられる、それは幾度となく聞いたような……でも少し違うような声

ゆっくりと振り返るとそこにいたのは

「ゴミ拾いって感じじゃあないねえ？少し私とお話ししようか？」

「オールマイトオ!!？」

現N O. 1ヒーロー、オールマイトその人だった

……

「リサイクルの精神は評価するけどねえ、いくら不法投棄物だからってゴミを勝手に持って帰るのは良くないぞ！少年！」

「はい……すみませんでした……」

今僕は憧れのN O. 1ヒーローにお説教をされているのです

「ああ……そんなに萎縮しないでくれよ！リサイクルの精神は評価するって！」

「ありがとうございます……」

「さっきの話を聞く限り……君はいわゆる発明家ってやつかい？それなら」

オールマイトは近くにあった冷蔵庫を地面と右手でプレスして潰してこう言った

「どうだい？私と一緒にこの海岸のゴミ掃除といこうじゃないか！なあにちよつとした奉仕活動さ！君の発明品で使えるものがあつた

ら見せてくれて構わないぜ少年！」

こうして僕は1日オールマイトと海岸のゴミ掃除をすることになったのだった

……………

「いやー君の発明品を使って構わないとは言ったけどねえ…ちよつと規格外すぎやしないかい!?!?」

今僕は新作のパワードスーツを装着していた

青を基調としたスーツで、これでもかっちゃんをモルモットにして3回に渡ってグレードアップを重ねた新作だった

そして今僕が持ち上げているのは古い型の冷蔵庫、の上に軽自動車を乗せたものだった

「いやーまだまだパワーアップ出来そうで研究と改善の真っ只中ですよ〜」

オールマイトに褒められて気分はもう有頂天、まだまだ色々乗せて軽トラに積み込む、オールマイトも軽トラを運転することしか出来ないくらいだ

「待って！緑谷少年！流石に軽トラに自動車は積めないから！」

「あつすいません！じゃあ持ったまま処理場に」

「大丈夫！ちよつと大きめのやつ借りてくるから！ちよつと待ってて！」

そう言い残し、オールマイトは軽トラで走って行ってしまった

「うーん…家からもつと色々持ってこよう！」

せつかくの機会だ、オールマイトに僕のサポートアイテムを見てもらおう！きつと将来の糧になるはずだ！

……………

「お待たせ少年！お昼時だからご飯買ってきたよ！牛丼でよかったかな？」

「あつわざわざすいません…」

「なーに良いってことよ！私の頼まれたことをほぼ1人でやらせてしまったからね…せめて特盛牛丼くらいは奢らせてくれよ！」

「オールマイトの奢りなんて…感動です！」

でも少し変だ、オールマイトの分の昼ごはんがない

「あの…オールマイトの分は無いですか？」

「えっ!? あーえっと！ごめん！私は先に食べて来たから！だから…大丈夫!!大丈夫だよ！良いね!!」

…変だ、オールマイトの好物は赤身のステーキのはず、そもそもオールマイトが牛丼屋に入って行ったなら少なからずSNSに情報が出てくるはずだ

「……………」

「あのー、緑谷少年？何をそんなにまじまじと見つめているのかな？」

スーツのヘルメットに内蔵された『ヘルススキャン』でオールマイトの体を探る…そこには驚くべき結果が表示された

「…!?呼吸器が半分しかない!?しかも消化器が…全摘済み!??一体…」

「えっ!??そんなことまでわかるの!??」

どうやらスーツの機能の誤作動ではないらしい…じゃあ…

「なら、隠していても仕方ないな」

そう言うとおールマイトの体から煙のようなものが上がり、その巨体をすっぽり包み込んでしまった

煙が晴れると、そこにはガリガリに痩せ細った男性が表れる

「やあ、隠していてすまなかつた改めて、私はオールマイトだ」

……………

「5年前、あるウイルスと戦ってね…辛くも勝利したが、このザマさ…」

「5年前…じゃあ毒毒チエーンソー…」

「ハハッ…そんなチンピラなんか比べ物にならないくらいの奴だ…当然公にはされてない」

5年前、間違いなくオールマイトの全盛期の頃だ、それをここまでにしてしまうようなウイルス…一体どんな奴なのだろうか、例えばあの自分が知る限り最強の幼馴染が僕のサポートアイテムを装備したとして果たして勝てるのか、僕は震え上がってしまった

「なあ…少年、君はサポートアイテム職人を目指しているって言うって

いたね、聞かせてくれ」

オールマイトの雰囲気が変わる、それは今まで聞いたこともないくらいに覇気がこもった声

「君はこの話を聞いて…それでもヒーロー達の手になりたいと思うかい？君の発明品で多くの人々を救えると…本気でそう言い切れるかい!?？」

「僕は…」

そんなこと言われようと関係ない、僕は既に決めているんだから

「僕はなりません！必ず！あなたのようなヒーロー達の力となる最強最高の職人になります！なってみせます!!」

「フフツ…よく言った少年！」

オールマイトの口から笑みがこぼれて、再びいつもの筋骨隆々の姿になって

「なら君の発明品でここを綺麗にして見せるんだ！それが君の職人街道の第一歩だ!!」

「ハイ!!」

そして僕は気持ちも新たに必ずあの幼馴染を最強のヒーローにするって誓ったのだった

「あっそうだオールマイト」

「なんだい？少年」

「その様子じゃあ5年間ずっと空腹なんじゃないですか？」

「まあ、胃が無いからね…医者が用意したゼリー飲料で賄ってるよ…」

「それなら！」

僕は家から持ってきたベルトと小物を取り出す

小物にはオレンジのレリーフが施され、小さな錠前のような形をしていた

「緑谷少年、これは？」

「まず、ベルトを巻いてください！」

「…はい、巻きました」

「したらバックルにこの『ロックシード』を装着して…」

オールマイトの腰のベルトにロックシード…オレンジのレリーフ

が施された錠前を着ける

「どうですか？」

「いやどうですかって…うん？」

ロックシールドシステム…錠前状のエネルギーパックを通して直接体内にエネルギーを吸収させるシステムだ

「おお？なんか満腹感がある？！？こんな感覚まさしく五年振りだぜ！！」

そして腰部からの電気刺激で脳に擬似的な満腹感を与えることができる

「どうですか？災害現場での栄養補給を考えて作ったものなんですけど」

「いや…どうって君い…」

「えっと…何か不都合ありましたか？」

「最高だよ！！こんなのが欲しかった！！こいつを売ってくれ！！特許料込みで言い値で買った！！」

「落ち着いて下さい！！差し上げますから！」

「ダメだ！！技術を安売りしちやあナメられちまう！！それなら…この値段でどうだい！！」

スマホの計算機アプリに表示されたのはとても男子中学生が手にしてはいけない数字

「えっと…ジンバブエドル…？」

「ナンセンス！！もちろん円だ！！」

これからはこんな廃材漁りなんてやめてこの資金でしっかりとした材料を買ってくれよ！！それじゃあ…」

オールマイトは体をマッスルに戻して

「お掃除再開だ！」

また僕との海岸掃除を始めるのだった

No. 4 最強の2人 最高の2人

「かつちゃん!」

「よお出久、時間通りだな」

ボクは今かつちゃんの家に来ていた

「それが…あれか、俺の」

「うん、かつちゃんにデザインを考えてもらったヒーロースーツだよ」

「よし!早速見せてくれ!」

かつちゃんの部屋に通され、鞆からかつちゃんのヒーロースーツを取り出す

「まずは全体のデザインから、爆発をイメージした髪飾りにはノイズキャンセリングを搭載してる、爆発の轟音から鼓膜を守れるようにね」

「その辺はべつにあってもなくても俺は耐えられるけどな」

「耐えられるじゃあダメなんだよ、細かいダメージの蓄積は将来に必ず響くよ、二十代のころに徹夜とかオーバーワークとかで三代半ばで引退せざるを得ないヒーローなんて二桁じゃあ足りないくらいいるんだから」

「…おう、わかったよ…」

「えっと、それじゃあ次はマスクだね、口元はないからアイマスクだけだね、といってもこれ自体には大した機能はついてない、強いて言えば瞬きに連動してマスクの目だし穴が閉じるってだけだよ」

「それこそいるのか?」

「うーん、ある程度表情がわからないと不安がる人もいるだろうし、ほらオールマイイトみたいな素顔のヒーローって笑顔も商売道具だから、かつちゃんが不敵に笑ってるだけでヴィランにとっては恐怖だし市民から見ればもう大丈夫だっという安心感あるし」

「お、おう…」

「次、首にアーマー、軽くて頑丈、落下しても首を痛めない、肩の稼働を邪魔しない、特に何も付いてないけど後付けで色々つけられそうだね、二ト口を細かくマシンガンみたいに打ち出す機構でもつけよっか

？」

「いらん、俺を全身火薬樽にでもする気か」

「…じゃあ次はボディ、難燃耐熱対衝撃防刃防弾なんでもござれの伸縮性のあるスーツに膝にはプロテクター付き、これで不満が出るようなら全部作り直すよ」

「いや十分すぎるわなんだこれ至れり尽くせりかよ」

「いやー頑張ったよダイラタンシー流体ってのがあってね、要は衝撃を受けた時にだけ硬化する液体で、こいつを二重構造のスーツの間に挟み込んでるんだよ」

「詳しい説明は長くなるから飛ばせ」

「ごめん、じゃあ次は籠手だね、と言っても受験に持って行ったのとそんなに変わらないよ、ただ貯められるニトロのキャパシティを5%上げてある」

「またキャパシティ上げたのかよ、初期型に比べてもう3倍くらい増えてねえか？」

「やっぱ継続戦闘にはキャパシティが大事だからね、常に最高のパフォーマンスを発揮できるようにするってのは大きいでしょ？」

「で、俺の要望書にはこの足アーマーはなかった筈だが？」

「かつちゃんが指を指すのは手榴弾のデザインをした籠手と同じデザイン足の足アーマー」

「まだ試作品だけど籠手とニトロタンクを共有できる足アーマーでシューズの裏から今掌から出してるのと同じようなことができるようになってるよ」

「移動の方法が増えるってのは良いな、今までよりも攻撃にバリエーションが出来るそうだし」

「あと、要救助者を手で抱えたまま空中を飛べるのを想定してるよ」

「そうか…確かに手が塞がると何も出来ねえ…そういうことなら必要な装備だな」

「さあ！早速着て見せてよ！」

「おう！」

……………

「できた？」

「おう！良いぜ！」

かっちゃんの部屋の扉を開けると、ボクの作ったヒーロースーツを身に纏ったかっちゃんの姿があった

「流石だねかっちゃん、デザインの才能もあるんじゃない？」

「まあな…」

「？どうしたの？何か不備があったのかな？」

「いや、改めてこうしてヒーロースーツを着てみると…なんかこう…込み上げてくるんだよ…腹の底からって…体の内側からって…
いうか…俺は…ヒーローになるんだって！」

「うん…そうだね…ボクも感じてる…ボクの作ったスーツを、サポートアイテムを誰かが誰かを救うために使うって…うさ…なんだろうなこれ…すごく誇らしいよ！」

そんなやりとりをしていると、扉がノック無しに開く、かっちゃんのお母さんがお茶を持ってきてくれたようだった

「ごめんね出久くん！お茶出すの遅くなっちゃって…あら！それ勝己のヒーロースーツ？凄いいじゃないこんなの作れちゃうなんて！」

「あつすいませんおばさん、お構いなく」

「ちよつと勝己！そんなのつくってもらったんだから絶対No. 1
になんないよ！」

「あつたりまえだ！これがあれば負ける気しねえわ!!」

我ながらよく出来たと思う…間違いなく、ボクの短い人生のなかでは最高傑作だ

よし、雄英高校でもっと色んなことを学んでこのスーツをさらにアップグレードしよう、いつそヒーロー科の生徒のスーツをもっと作ろう

ボクは史上最高世界最高のサポートアイテム職人になろう

No. 5 雪だるま式苦労人

「フンフン〜♪ふふ〜ん♪フウー!」

今、私オールマイトは雄英高校の施設を見回っていた

母校ではあるがしばらく訪れていなかったもので、様々な施設が増改築され、これから教師として働く職場の内容をこの春休みが終わるまでに頭に入れておかなければならないのだった

「ここが保健室ね…リカバリーガールはいらっしゃるだろうか…?」

しかしながら雄英の生徒たちの真面目なこと、春休みの間に雄英の施設を利用して自主練や先生がたにアドバイスをもらうために、ほぼ毎日生徒が誰かしら学校内にいるのだ

当然、事故などで怪我を負う生徒がゼロというわけではない、そのためリカバリーガールは春休みの間も保健室に常駐しなければならぬ

「失礼します!リカバリーガールはいらっしゃいますか?」

「オールマイト!静かにおし!誰か寝てたらどうすんだい!」

いらっしゃった、雄英の屋台骨ことリカバリーガール

治癒の個性を持つ彼女の存在があつてこそ今の雄英の訓練がある

そして私にとつても非常に大事な存在で私の個性のことからこの傷のことまで全て彼女が知っていた

当然頭も上がらない…

「すつ…すみません…リカバリーガール…」

「全く、No. 1のくせにデリカシーがないつたらありやしない!

まあ、二年生にもなればなかなか怪我をする生徒もいない、あたしやこの春休みの間だけなら暇だからね…とところで」

リカバリーガールは、私の体をじっくりと眺める

「あの…何か…?」

「あんだ、ここ最近随分と調子良さそうじゃあないか?何かあったのかい?」

「!お分かりですか!実はこの『ロックスード』というアイテムの効果で栄養補給が非常に楽、かつ効率的に出来るようになりまして…満腹

感もあり、まさに今の私にうってつけな」

「この馬鹿!! 医者の断りもなくそんなもん使ってんじやあないよ!! 今根津を呼んでやったからね!!」

.....

「オールマイトくん?なんで正座させられているかはわかるね?」

「:ハイ:申し訳ありませんでした:」

「君は平和の象徴であり、ありとあらゆる悪意の抑止力!そんな君が6年前から弱体化しているという事実を誰にも悟らせるわけにはいかないのさ!」

「医者の断りもなくこんなもの使って:全く!」

「:ですが:それ自体はきちんとI・アイランドにいる私の友人に依頼して作ってもらっているきちんとした出自の:」

『自体は』ってどういうことだい?これのオリジナルの作者は一体誰なんだい?」

...やっちまった:一言余計に話してしまった

「あの:今年のサポート科の新一年生の緑谷出久くんという生徒です:」

「!?緑谷出久って言ったら!」

「えっ!リカバリーガール、ご存知なのですか!」

「いや、ご存知も何も:あそつか!君はヒーロー科の試験で忙しかつたんだったね、なら知らなくても仕方ないのさ!」

いいかい?緑谷出久くんは今年度のサポート科の入試主席生徒なのさ!」

「そうだったのですか!」

アンビリーバブル:只者ではないと思っただが、まさかあの筆記試験を主席で突破するとは:」

「ふーん:しかしねえ:医者の視点から言わせるとこれは正直言っただあんたにうってつけと言えば確かにそうだ、ヒーローの活動のサポートという点で見ても栄養補給に使われるようなゼリーや固形食なんかと比べ物にならない速度で直接栄養補給が出来る:電気刺激で満腹中枢を刺激するのもいいアイデアだよ」

「うん…正直これを中学生で作れるってのは…正直一年生の授業では手に余るかもしれないねえ…」

「けどこんなのはアイデア先行で作り出しているだけに過ぎないだろ？もつとサポートアイテム職人の基本をできているか見るべきだね」

根津校長とリカバリーガールがうんうん唸りだし…根津校長が先に口を開く

「そうだね…plus ultra!より高き能力にはより高き受難を！って事で、緑谷くんにはこの春休みに特別な課題をやってもらおう！そうして一定の能力があると判断されれば他の生徒より進んだカリキュラムを適時与えてあげるって事で！」

そうして、緑谷少年に雄英からの特別な『宿題』が課せられるのだった

……………

「出久ー！雄英高校から電話が！」

母さんが僕を呼び出す、雄英高校からこの時期に電話がかかってくるなんて…何かしちやつたのだろうか…心当たりが多すぎる

「ハイ…電話変わりました…緑谷出久です…」

「ん、俺は今年度のサポート科の担任、パワーローダーだひとまず今年からよろしくね

早速本題に入るが、君オールマイトさんに自分の発明品を買ってもらったそうじゃないか、君が売り込んだのかどうかはわからないが、平和の象徴がつけても問題ない装備を作るだけの實力があるところらは認識している

ある程度の実力を持った人間にそれと並かそれ未満の人間に向けた授業するのは…まあ『合理的』じゃあないって事で

君にはある課題を出させてもらう、入学前だけでもそこはplus ultraって事で…」

「はっハイ!!」

「君には今から電話口で説明するある個性を持ったヒーローのサポートアイテムを作ってもらおう、提出期限は入学式当日の放課後まで、で

きなかったらできなかつたってはつきり言ってもらって構わない、でも進んだ授業を受けたいのならしつかり完成させた方がいいと思うよ」

「わかりました！」

よし！そういう事ならやってやる！

「いい返事だね…いいかい？電話口で、一回しか言わない、しつかりメモ取るときなよ？」

まず…基本の個性の能力は肉眼で見た対象の個性を抹消するといふものだ」

素早くメモを取る

肉眼で見た個性を消す…

「消せるのは発動系と変形系に限る、異形系には効かないし本人には身体能力のブーストもない」

発動と変形には効く…

「それからこれは正直本人の問題でもあるんだけど…彼ドライアイなんだよね…だから目薬が手放せなくてね…」

ドライアイ…！わかりやすい弱点だ！

「ここまで、質問は一回なら受け付けるよ」

「…はい！このヒーローって…『イレイザーヘッド』じゃあないですか！？」

「えっ!?!これだけでわかるの!?!」

「やっぱり！じゃあ早速作らせて頂きます！」

「えっあっうん…出来上がったらアポなしで雄英に持ってきていいから…あつ来る時には交通費出すからタクシー使ってもいいからね？」

それじゃあ楽しみに待ってるから…」

「はい…」

よし…そういう事なら早速やるぞ！

「イレイザーヘッドなら…ゴーグルと一体型のものを作ろう…ドライアイなら…涙液を常時補充出来るように細いチューブに人工涙液を通して…涙液タンクは首元に付けられるようにすればマフラーで隠せるはず…」

……

「ハァー…」

「参った…予想以上…まともな情報なんて個性を消すってだけしか言っていないのに彼はメディア露出を嫌うアングラヒーローであるイレイザーヘッドを言い当てて見せた」

「どうしたんです？パワーローダーさん」

「あー…相澤くん…いや、今年のサポート科の主席生徒くんがね…」

「俺用のサポートアイテムを作らせる試験って事でしたけど、どうなんでしょうか？」

「ぶっちゃけるよ、彼ね、君のこと知ってるみたいだよ」

「は!?徹底してメディアには出ないようにしているんですよ俺は」

「それでも決してゼロじゃあない、例えばその場に居合わせた人が動画に撮ってネットに上げたとか、それに君だってヒーロー名を名乗っていないわけじゃないだろう？」

「てことは緑谷出久は…」

「筋金入りのヒーローオタクで、ヒーローの知識もある…多分ヒーロー免許持ってるだけでヒーロー活動してないとかでもない限りは知らないヒーローがいるのかどうか…」

「ね？予想以上でしょ？」

「サポートアイテム職人として、ヒーローの知識は必要不可欠…個性の情報だけでヒーロー名まで割り出すとは…しかもアングラヒーローの俺を…」

「おっ、相澤くんが興味を示してる…」

「早く見てみたいな…緑谷くんのサポートアイテム！」

No. 6 先生の心生徒に知らせず

「うう…アポなしで良いって言ってたけど…周り上級生ばかり…春休みなのにみんな雄英の施設を使うために毎日来てるのか…すごいや…」

「やあ…どうしたんだい？入試のときに忘れ物でもしちやったかな？」

すると、僕に話しかけてくる上級生

金髪を逆立てていて、つぶらな目をしていた

「あつあの！僕は今年度のサポート科の新入生で！でも雄英から課題を出されていまして！それで！その課題を持ってきた次第でありまして!!」

「あー良いよそんなガツガチにならなくても、それなら職員室に案内するね

俺は通形ミリオ!!君は？」

「はい！緑谷出久です!!よろしくおねがいます!!通形先輩!!」

「ミリオで良いよ!すごいね君!まだ入学式も迎えてないのに課題を出されるなんて…きつと先生達は君に期待しているんだよ!だから胸張って歩きな!」

「はい!ミリオ先輩!!」

そうしてミリオ先輩に案内されて僕は職員室の前にやってきた

校舎の中は何もかもが巨大で圧倒される

「大きなドアはバリアフリーなんだ…すごい…流石雄英…合理的な理由で大きく作っているんだな…」

「君すごいね!俺はそこまで考えたことなかったよ!」

さあ!ついたよ!職員室!

すいません!通形ミリオです!失礼します!今年度のサポート科の新入生が課題を持ってきたので案内してきました!

ミリオ先輩がそう言って職員室に入ると、職員室は一度静まり返る「えっ…早くない?パワーローダーさんが緑谷くんの家で電話してからまだ4日しか経ってないわよ?」

とミッドナイト

「イヤ：パワーローダーが電話ヲカケタノハ夕方：ツマリ彼ハソコカラ実質3日デ完成サセタトイウノカ：」

エクトプラズム

「コイツはシヴィー：」

プレセントマイク

「えつとりあえずどうします？今日パワーローダーさん席外しているんじゃない？」

13号

「つてなると：やっぱり：」

セメントスら各先生方が顔を見合わせる

すると、奥の席に座っていた人が立ち上がる

ボサボサの髪の毛に長い捕縛布をマフラーがわりにかけた全身黒ずくめのヒーロー

「俺のサポートアイテムを想定して作ったものなら俺が見るのが合理的だろ」

イレイザーヘッド先生だった

……………

「じゃあ、生徒指導室を使うか、どうせ使う機会なんてないから座る場所のある物置になってるけど

それで良いな？」

「はい：よろしくおねがいます！」

二年：いや、進級して三年の通形ミリオが案内してきたのは4日前にパワーローダーさんが電話で話したサポート科主席生徒の緑谷出久

なんでもオールマイトさんが腰につけていたロックシードとかいうエネルギーパックの発明者であり、その実力を値踏みする意味を込めて今回、アングラヒーローであり正体を知られない可能性が高い俺の個性と弱点の情報を与えてどんなものを作ってくるのかで今後の授業の展開を早めるか、足取りを合わせるかを考える：ということだったが、この生徒：個性を消すという情報だけで自分がイレイザー

ヘッドだということに気づいてそれに合わせたものを作ってきたというのか…わずか3日で

「イレイザーヘッド先生って…」

「相澤で良いよ、ヒーロー名を呼ばれるのは好みじゃない」

「はい！相澤先生って、雄英で教師をしていたんですね」

「そうだね…あまりメディアには出ないから分かるはずないんだけどね…どうして俺だってわかったんだい？」

まずはこれだ、個性を消すという事なら別に俺以外にもヒーローはいる

「えっと…目を使うことで個性を消すヒーローをイレイザーヘッドしか知らなかったので…一つ質問を出来たので聞いたら当たっていました」

「それで…違うと言われたらどうするつもりだったんだ？」

「ほかの、目を使って個性を消す能力を持ったヒーローを探して、参考にして共通で使えるものを作ろうと思っていました」

「架空の個性の可能性は…って言うのは合理的じゃないな

じゃあ早速みせてくれ」

「はい…」

そう言うと、緑谷は小型のアタッシュケースを開けて中の品を見せってきた

それは現在俺が使っているゴーグルによく似たもので、液体の入った細めのパックが横に2つ置かれていた

「俺が使っているゴーグルに瓜二つだな」

「はい！使用感を変えないようにあえてイレイザーヘッド愛用のゴーグルからデザインは変えていません！」

別に愛用してるわけじゃないんだけどな

だからこれは正直『解っている』

「解っているな…ヴィランと戦闘を行う上で装備の使用感はかなり重要だ、例え同じ機能であっても形が変われば行動が微妙に変わる、その微妙な行動の変化が隙を与えてしまうことはよくある

あえてデザインを変えないのは合理的だ」

「では本筋、この液体パックの説明です！ズバリ！『人工涙液タンク』です！

ドライアイと聞いたので自動で涙液を補給して目を開けていられる時間を増やすことができるようにしました！

毛細血管ほどの細さのチューブが丁度目尻の位置に来るように調整して装着すれば首元につけることを考えて設計したタンクから人工涙液が随時補給されます！」

「ほう…なら一度着けさせてもらおうぞ」

ゴーグルを装着する、チューブを目尻の位置に来るように調整しようとする、ゴーグルのバンドにチューブの位置を示すように絶妙な凹凸をこめかみに感じることができ

「…こめかみの圧迫でチューブがどこにあるかを示すのか…これならすぐにチューブの位置を合わせられるな

で、涙液タンクはうなじにかけるのか…これには何か理由があるのか？」

「はい！相澤先生の武器は頑丈な捕縛布！それを普段はマフラーのようにクビに巻いています、首元の涙液タンクを捕縛布のマフラーに隠すことができます！

首元のタンクが空になったら引っ張ったらすぐに取り外せます！そのまま捨てても生分解性プラスチックなので自然にも優しいです！

リロードについては新しいタンクをまた首元にかけてゴーグルのバンド後ろのチューブの接続部をタンクのどこでもいいので刺してもらえればそれで大丈夫です

実験ではタンク1つで4時間は持ちます！首を動かす動作を多めにしても2時間30分ほど持ちました！」

たしかに予想以上だ…環境にも配慮してそのまま捨てても問題なく戦えるとは…

「だが、タンクにチューブを接続したらそのまま垂れ流しか？」

「いえ、ゴーグルのバンドが緩むと弁が閉じて涙液の補給が止まるようになっています」

「ほう…つまり使わないときにはゴーグルを外しておけばそれだけで良いと…そしてゴーグルをつけている時だけに涙液の補給が行われる

タンク1つで最大4時間…戦闘を2時間30分も連続して行うことはほぼない…あつたとして準備をしてから突入するような大掛かりな作戦が前提…それでも液が切れたら捕縛布で隙を作れば巻いて刺すだけで次のタンクにできる…ほう」

なるほど…オールマイトさんが手放しで絶賛するのも頷ける

たった3日でここまでの製品をここまでの完成度で実現できるとは

「とりあえず…課題としては96点だな…まさしく俺に必要な装備だが、このままだと冬や寒冷地ではタンクの冷気で体温を奪われてしまう」

「その時のために冬季用のファアのオプションがこれです!」

「最初から出しておいた方が合理的…いや、プレゼンならこうでいいのか…だがこれだとどこにも刺さるというタンクの長所が死んじまうんじゃないか?」

「いえ!このファアは首に当たる部分だけを覆うようになっています、上半分のどこにでも刺さる利便性は確保されています」

そして、タンクの部分だけを剥がせて、ファアは首に残る仕様です」
「そうか…満点だよ、このまま買い取りたいくらいだが俺には特許料を買うほど金は出せない、お前が一刻も早く開発許可証を取得する日を待っているよ」

「…はい!ありがとうございます!」

そして緑谷が雄英を去った後、パワーローダーさんが戻ってきた

「パワーローダーさん、今日緑谷が来ましたよ」

「うっそ!もう!?!」

で、どうだった?」

「想像以上…ですね、なんだったらこのまま現場に持っていきたくらいですよ」

「君がそこまで言うって凄いね…なんなら緑谷くん相談するかい?」

彼ならきつと格安で譲ってくれると思うけど…」

「それは駄目でしよう、学生の時点でこのレベルなんですからいずれ経験を積んだ暁にはさらに多くの同年代ヒーロー達のサポートアイテムを作るでしょう、その時のためにも今我々が安く買い叩くのは合理的じゃない」

「まあ…そうだね…」

「それに、プロの現場に持っていけないだけで、学校内なら問題なく使えるんでしようから」

「使う気は満々なんだね!？」

緑谷出久…こいつに必要なのはやはり経験か…

「そこまで言うなら技術面では教えられることないなあ…刺激と…経験…それがあればどんどんグレードアップしていくでしよ彼」

「ならヒーロー基礎学の授業を見学させてやりますか？」

「そうだね、基礎学の見学と自由制作の時間を交互にとって貰えばきつと彼にとっては素晴らしい経験になると思うよ!それで行こうか!」

覚悟してかかれよ緑谷…

雄英はお前に人一倍の試練を与えるぞ…

plus ultra…乗り越えてみな!

No. 7 新芽は風雨にさらされてまっすぐに育つ

俺、爆豪勝己は雄英高校ヒーロー課の入試主席生徒だ

誰より多くのヴィランロボを破壊して、瓦礫に足を挟めた女子を救けるついでに0ポイントのバケモノロボを木っ端微塵に吹っ飛ばした

そんなわけで俺はこのヒーロー課において敵はいないと勝手ながら思い込んでいた、だが現実はその甘くはなかった。

入学式代わりに行われた個性把握テストの中であるものは重力を消してボールを無限に飛ばし、またあるものは持久走で原付を創造して圧倒的な速度で走る

結果個性把握テストでは一位を取ることが出来なかった

(クソツツ！こんなんじやあアイツとの約束を果たせねえ!! もつと!! もつと強くならねえと!!)

「な、なあ爆豪？途中で声出てんぞ？」

そう言っただけ話しかけてきたのは赤い髪を逆立てた生徒だった

「あー…すまんなんて名前だお前」

「俺は切島鋭児郎な！なあ…アイツとの約束ってなんだよ？すつごいアツイじやあねーか！」

…あーこいつ多分バカなんだな、しかも不快感を感じないタイプのバカだ、始末に負えない

「幼馴染との約束だ、最高最強のヒーローになるんだって、そしてアイツは史上最高世界最高のサポートアイテム職人になるって…だが現実はこのザマだ」

「いやあれはだいたい例外的っつうか、なんというかお前三位じやねーか」

「それでもあの紅白頭には勝てるはずだった」

それはそうだ、持久走で原付造る奴に人力で追い越せてるのは流石に無理がある、タイマンならば真っ正面から打ち破れる

「だからこそ俺はもつと強くならなければならぬんだ」

「アツイな！そしてクレバーだな！」

「爆豪くん!!」

横から眼鏡の生徒が話しかけてきた

「あー…お前も誰だ」

「俺は飯田天哉だ！これから時間はあるか？もしよければうちの敷地で一緒にトレーニングをしないか？君も対人でのトレーニングを積みばもっと動きが洗練されていくはずだ」

「そうか…飯田、悪いのが頼めるか？」

「よし！ならば善は急げだ！」

「おい！俺も一緒に行かせてくれ！」

「そうだ…アイツも誘ってみるか」

「なあ飯田」

「どうした爆豪くん」

「サポート科にいる俺の幼馴染も連れてって良いか？きつとトレーニングの役に立つはずだ」

「！サポート科の生徒の力を借りられるのは心強い！ぜひ頼む！」

……………

「つつーわけで特訓の手伝いを頼む」

「色々唐突だけどわかったよ」

「こいつは昔からこうだ、頼まれたことを二つ返事で引き受けてくれる」

少しは考える頭を持ってっただ

今いるのはクラスメイトの飯田の家、なかなかの豪邸で私有地なので個性の制限もない、それに

「両親共にプロヒーローでしかもお兄さんはあのインゲニウム…飯田くんってすごいね…」

「俺が凄いいんじゃない！兄さんや両親が凄いだ！」

「なんでもいいけどさっさと始めろ、時間は有限なんだ」

「落ち着けて爆豪、緑谷の気持ちも分かるけどさっさと始めようぜ…ところで具体的に何するんだ？」

切島が出久に声をかける

何するってこいつの考えることだ、個性に合わせて何か考えがある

はずだ

「うん、それなんだけどまず切島くんの個性は硬化で飯田くんの個性はエンジンかつちゃんの個性はニトロ、それぞれを一気に鍛えるならどの個性にも効果のある方法がいいと思うんだ」

…まずい、出久が少し面白さを感じてる

冷や汗が頬を伝う、こういう時は大抵ロクなことにならないんだ、俺は幼馴染だから10年分の経験がある間違いない、出久が何かを仕掛けてくる

そう思ったのもつかの間、出久がバッグからアタツシユケースくらの大ききの機械を取り出した

「切島くんはとにかく硬化で攻撃を耐える、飯田くんはとにかくエンジンを使って攻撃を避ける、そしてかつちゃんは…」

機械のボタンを3つ押すと

「カイジョシマス」

無機質な合成音声のアナウンスが鳴り、機械が変形する

それは6つの金属製の筒が円形に並べられた…いわゆる

「ニトロの爆破でひたすら『弾丸』を弾くって感じで」

ガトリングガンだった。

No. 8 特別な訓練と書いて特訓

俺は切島鋭児郎！教室で話しかけた爆豪ってやつと飯田ってやつ
の家で特訓をすることになった！

飯田の家はもうすごい豪邸で、俺の家なら二軒くらいは建つちまう
んじゃないかってくらいデカさだった

そして爆豪が連れてきたのはもじやもじや頭で顔にそばかすをつ
けたサポート科の男子生徒、いかにもオタクって感じの奴だった

「よお！えつと…緑谷だったな！今日はよろしく！」

「あつ…えつと…うん！よろしくね！切島くん！早速個性を教えるも
らって良いかな？」

「おう！俺の個性は『硬化』つつつて、体を岩みてえに硬くできる、ほ
ら！」

そう言つて腕を硬化させて見せると

「！なるほど！まさしく『硬化』！でも関節が曲がらなくなつちやうの
か…強い衝撃を加えたらこれ折れちやわないかな？」

「あ……やったことないからわかんないわ」

「ならまずは硬化の限界を探るのと…硬化つて自分で解くまでは解け
ないの？」

「いや、どんなに頑張つても10分が限界だ、あと攻撃食らつたらその
分削られる…まあプールで気張つてるようなもんだな！」

「じゃあスタミナをつけるのと、インターバルを見極めるのが大事か
な…うんうん！プランがだんだんできてきたよ！」

そう言つと、緑谷は馬鹿でかいリュックをガサゴソ漁つて、書類
ケースくらいのゴツイ機械を取り出した

「切島くんはとにかく硬化で攻撃を耐える、飯田くんはとにかくエン
ジンを使つて攻撃を避ける、そしてかつちゃんはニト口の爆破でとに
かく弾丸を弾くって感じで」

そう言つと変形させた機械から大量の弾丸が飛び出して来た！

「ウオオオオオオオオ！」

とつさに体を硬化させて弾丸を耐える！

「おまつ!!緑谷!!不意打ちは卑怯だろ!!」

「そうだ!!緑谷くん!!訓練なのだからせめて掛け声くらいはないと!!」

飯田も弾丸を避けながら猛抗議する

「馬鹿2人!!出久が銃取り出した時点で動き固めとけ!入試と同じだ!!コイツにも『よいドン』なんて言葉は無え!!」

爆豪も弾丸を弾きながら叫ぶ

しかし、ものすごい弾幕でだんだんと硬化が持たなくなってくる

「ぐっ!!?」

後ろで避けまくってた飯田がついに被弾する、緑谷はその飯田に弾を集中させる

「痛だだだだだ!!?」

「大丈夫!暴徒鎮圧用のゴムスタン弾だから!多分めっちゃ痛いけど…かっちゃんは生きてるから死にはしないよ!」

「飯田!!」

飯田と緑谷の間に割り込んで飯田の弾除けになる、硬化が解けそうになるが

「ウオオオオオオ!!」

そこはとにかく気合いでカバー!

「オラア!!」

俺と飯田に弾が集中してる間に爆豪が緑谷に接近する

銃口が爆豪に向けられて

「ぐっ!!」

再び爆豪の動きが弾幕で止まる

(今なら緑谷に接近できる!)

体の前半分だけを硬化させて足全体を一步步つ動かして、ジリジリと近づくと

「爆豪!!」

「わかった!!」

その後も俺に銃口が向けば爆豪が近づき、爆豪に銃口が向けば俺が接近する

緑谷と俺の距離があと1メートルくらいになった時に

「…弾切れ!？」

ガトリングガンが弾切れを起こした

「今だア!!」

「待て!切島ア!」

爆豪が叫んだ時にはもう遅かった、緑谷はポケットから取り出したのかハンドガンを構えていて

「痛っで!!」

硬化されてなかった眉間に当てられたのだった

……………

緑谷に不意打ちされた特訓を終えた後、飯田のお母さんが用意してくれたドリンクを飲みながら休憩をしていた

「おい出久!コイツらは俺とは違ってお前なことなんか全然知らないんだぞ!!少しは手加減するってことを知らねえのかお前は!!」

爆豪が緑谷に文句を叫んでいた

「でもヒーロー科だし…A組って入学式すっぽかして個性テストやったんでしょ?なら許されるかなって…」

「チィ…個性把握テストのことを話したのは失敗だったか…おい飯田!切島!コイツに文句の1つでも言っっちゃれ!」

「いや…たしかに個性把握テストを不意打ちされておきながらこの体たらくでは…」

「俺も同意見だ…実戦じゃあよーいドンは無いつて言われてたのにこのザマだ…俺と飯田はこれが実戦だったら死んでた」

「…だそうだから俺もグダグダ言わねえが…ほかの奴らを俺と同じように考えるのはやめろ!」

「でも隣に立つ仲間は1人でも多い方が…」

「10年の付き合いだから対応できるのを他の連中に求めんなって言うってんだ!」

「お前らそんなに深い仲だったのか…」

「ああ…ガキの頃から死ぬほどモルモットにされてきた…」

「例えばどんな?」

そう聞くと爆豪は、いわゆる『苦虫を噛み潰したような』顔で
「ああ…例えばだな…」
おどましきモルモット体験を語り始めるのだった…

No. 9 偉大なる実験動物

ガキの頃、俺はいわゆるやろうと思えばできるヤツで、個性が発現してからは輪をかけて横暴な態度を取るようになっていた

「勝ちスゲー！超派手な個性じゃん！」

「将来はヒーローね！」

周りの奴らも俺を褒め称えた

「かつちゃんすごいね！僕にも個性が早くでないかな？」

「お前に出てもどうせ俺以下だろ！」

そして近くにはわかりやすい俺以下がいた

「出久のヤツ無個性だってよ！」

「ダッセーの！」

そして俺以下は実在した

そして小学校に入った頃

「かつちゃん!!」

「なんだ？役立たずのデクノボーが俺になんの用だ？」

そいつは大人くらいのロボットを連れてきて

「ボクの作ったロボットと勝負してよ！ボクが勝ったらもうほかの人をいじめるのはやめて！」

こんなナメくさったことをほざきやがった

「良いぜ！受けて立つ！デクの作ったロボットなんか一発で粉微塵だ！」

.....

「えっ、お前らそんな感じだったの？」

「今の様子からは想像もつかないな……」

「まあ…あの時はガキ特有の万能感？つうか優越感に浸りながら生きてたんだよ」

「幼稚園の先生が褒めたのがターニングポイントだったよね」

「話を戻すぞ」

.....

「くっそー!!デクの作ったロボットなんか!!」

早い話が俺は負けた

悔しくて悔しくて何度も何度も繰り返して挑んだ、でも挑むたびにそれはどんどん強くなって

「今度は全身アーマーで固めたよ！」

「動きが遅せえ!!」

「エアガンを使えるようにしたよ！」

「爆破で弾けば無意味だ!!」

「合体して巨大ロボになるようにしたよ！」

「お前らも協力しろ!!」

結局そいつに勝てたのは

「勝ったア!!」

三年生の冬休みが終わる頃だった、今でも覚えている

「かつちゃんすごいね…まさかガーディアンを倒しちゃうなんて…」

「くっそお…デクの作ったロボットなんか…デクなんか…俺は

…」

「かつちゃん…」

「俺は最強で…個性も強くて…無個性なのに…デクのくせに…」

俺は勝ったはずなのに悔しかった、冬の寒さで動きが遅くなったロボットの落とし穴に埋めて頭に爆破を浴びせまくってようやく機能停止できただけで勝ったなんてお世辞にも言えない勝利だった

「うあ…ああ…」

悔しくて悔しくて、涙が出て止まらなかった、俺は最強でもなんでもなかった…ただ周りを通して良い気になっていただけだったってその時によく気付いたのだった

「かつちゃん…負けちゃったけどもかつちゃんの個性はきつとヒーローになるための個性だよ！かつちゃんがヒーローになりたいって言うならボクは全力でサポートするよ！」

「デクう…いや、出久！」

今までゴメン！その力を俺に貸してくれ！もう誰もいじめたりなんかしない！俺は最強のヒーローになりたい!!」

……………

「まあこんな感じだな、なんかハズいなガキの頃の話をするって」

「はー今の話聞いたらなんかアツくなってきたな!!もう一回やろうぜ!!」

「うん!俺も同じ気持ちだ切島くん!ところで爆豪くんが幼い時に緑谷くんを呼んでいた『デク』と言うのは…」

「あー…こいつの名前『出る』に『久しい』って書いて『イズク』って読むんだけどな、ほら読み変えたらな?」

「なるほど!『出久^{デク}」か!」

「しかし、木偶の坊という言葉を想起されるあまりよろしくない言葉だな…」

「でもさ、デクスターって言うスラングもあるし、あだ名ってこれしかつけられたことないからできれば気軽にデクって読んでもらえると嬉しいな」

「よし!じゃあオレはデクって気軽に呼ばせてもらおうぜ!」

「じゃあ俺も、よろしくな!デクくん!」

「俺はもう意地でもデクなんて呼ばねえからな!!」

そしてその数秒後にまた出久のガトリングガンがぶっ放されて切島を盾にして接近した飯田にガトリングガンは弾かれた

明日からは普通の授業が始まる、絶対にトップになつてやる…!!

「んで?具体的にどんな風にモルモットにされたわけ?」

「着るだけで全身複雑骨折するパワードスーツを装着させられたりエネルギー弾を発射するガラケーに撃たれたり、腰につけるだけで腹が減らなくなるエネルギーパックをつけられた時は3日後に脳が夢遊病を発症して台所で生米を食つてた…らしい、これ全部病院のベッドの上で発覚したから俺も詳しくは知らない始末だ」

「エグいなデク!!」

「もしかして俺達も同じようにモルモットにする気なのでは…いや!それこそが爆豪くんの強さの秘密ならば喜んでモルモットになろう!」

「いやー…ごめんねかつちゃん!」

うん、俺の代わりにモルモットになるやつが増えるのはありがたい

これで負担が減るといいんだけど…
「これからは3倍動かないとね！」
どうやら無理みたいだな、期待してなかったけど。

No. 10 狂気と狂気は引かれ合う

ここ、雄英高校は基本的には高等学校であり、午前中には普通に授業があり、午後からは各科目ごとの授業があると言う感じだった

「h a y!!この英文の中で間違ってるのはどれだー!!えつと…緑谷!!」

「はい！関係詞の場所が違う2番です！」

「正解だぜ y e h!!全員拍手ウ!!」

それはサポート科でも変わらない

そして昼は大食堂でのランチラッシュの一流の食事を安価でいた
だける

「なんか…ランチラッシュにカツ丼なんてオーダーしちゃって…よ
かったのかな…なんか罪悪感…」

「いいんじゃないですか？最終的に白米に落ち着くって言ってます
し」

独り言を呟いていると横に座ってきたのは

「えつ…ふえ!？」

ピンクの髪をした女子生徒だった

「あつすいませんいきなり話しかけてしまつて！サポート科のクラス
メイトの発目明です！あなたは緑谷出久さんですよね!？」

「あつはい…ほかに緑谷出久がいなければその緑谷出久です…」

「やっぱり!!話題になつてますよ！なんでもオールマイトとイレイ
ザーヘッドがあなたの発明品のユーザーだつて！良ければこの後見
せてもらつて良いですか!？」

「えつと…オールマイトが使っているのはロックシードで…イレイ
ザーヘッド…相澤先生が使っているのはロックシードと…あと僕の
作った『人工涙液自動補給システム』なんだけど…」

「ふーん…大衆向けの製品だけでなくそのヒーローにあつた品を用意
出来るんですね…」

「えつと…」

やばい、緊張する、今までの人生で何回女子と話す機会があつただ

ろうか、数えるまでもなくゼロだよゼロ！片手で数えられる

「ふふふ…思った以上の人ですね…私のベイビー達のさらなる飛躍に向けてこの人の技術力の高さは取り込ませて貰います！出久さん！いえ出久くん!!技術提供を前提にお友達になりましたよう！」

「ヒヤイ!!喜んで！」

無理だ、もう何も考えずに返事するしかできない

《緑谷出久くん、1年H組緑谷出久くん昼休み中に職員室に来てください》

校内放送で呼び出される、正直助かった

「あつえつとえつと…呼ばれちゃったからすぐ行くから！」

今までにない速さでカツ丼をかきこんで素早くその場を離脱する

「ふふつ、言質はとりましたからね？」

発目さんの手に握られた小型レコーダーにも気づかなかった

……

「緑谷、お前午後の授業でヒーロー科とヒーロー基礎学を見学しろ」

職員室に僕を読んだのは1年A組の担任で僕の作ったロックシードと人工涙液自動補給システムを使って下さっているイレイザーヘッドこと相澤消太先生

「えつと…パワーローダー先生は…」

「パワーローダーは了承済みだ、なんでも技術面で教えられることが無いから必要なのは刺激とヒーローになる連中とコネを作ること…らしい、このゴージャルの実績もあるからちようど良い機会だ、どうだ、やってみるか？」

「是非!!」

そんなの答えは決まっている、僕にはもつともつといろんな個性を見てそれを十分に発揮できるアイテムを作れるかどうかが重要な
だ

「よし、なら午後の授業が始まる時にA組の教室の前にこい、H組の連中には俺から説明しておいてやる」

そうして僕はサポート科でありながらヒーロー基礎学の授業を受けることになったのだった

そしてA組の前で待っているとオールマイト が歩いてきた、銀時代のコスチュームで

「やあー！こんにちは緑谷少年！相澤くんから話は聞いているよ！とりあえずいっしょに教室に入る？」

「はい！よろしくお願いします！」

「わーたーしーがー！！」

普通にドアから来た！！」

ガラスとドアを開けると同時に大きく叫んで堂々と入室する後ろからひよこひよこ姿勢を低くして追従する

A組は全部で20人、かつちゃん、飯田くん、切島くと目が合う、A組の全員が目を丸くして僕を見ていた

(ぱつと見でわかるのはあの尻尾と：服が浮かんでいるのは透明化かな？あの女子：耳たぶがイヤホンジャックになってる、それと腕が6本の人と：ピンク色の肌につノ：なんの個性だろう：いや！それを知って活かすための授業なんだ！！)

そんなことお構い無しに個性の考察を始める、流石にぱつと見ではわからない

そんな僕を横目に話は進んでいたようで

「あのーオールマイト先生？そいつはなんなんですか？」

そう質問したのは金髪の生徒、僕の苦手ないわゆるウエイ系の人っぽい

「上鳴少年！良い質問だ！彼はサポート科の入試主席生徒で今回はヒーロー科の授業を見学して今後の役に立てる目的で参加しているぞ！」

その言葉をきっかけに教室が大きくざわめく

「サポート科の主席ってマジかよ！」

「そんな人に見られるなんて緊張するー！」

「サポート科って女子生徒の3サイズ合法的に測れんのかな…」

「峰田、野郎の3サイズも測れないといけないんだぜ？」

「俺の個性にあったのも作ってくれんのかな…ならもつとヒーローっぽくなれるかな？」

「心操ちゃんにとっては深刻な問題ね、ケロケロ」

「うーん！聖徳太子ー!!」

「じゃあ着替えたら順次グラウンド・βに集合だ!!」

.....

「遅いな...」

自作の腕時計を見てそう呟く、すでに6分くらい経っているのに未だに1人もグラウンド・βに現れない

「...教室から更衣室までの移動には最短42秒...多く見積もって50秒くらいか...そこからグラウンド・βまでの移動にはおおよそ2分...合計で3分と仮定して着替えに4分くらいかかるのか...足甲の装着が問題なのかな...籠手はハメるだけだからそんなにかからないはずなんだけどな...」

「緑谷少年？ブツブツ呟いてどうしたんだい？」

オールマイトが心配した顔で話しかけてきた

「あつすいません！A組の爆豪って生徒のスーツを僕が作ったもので...」

「なるほど！それでなかなか現れないのを心配していたんだね！」

「はい...着替えに時間がかかる装備を作ってしまったのかなと...」

「その向上心はグッド！それをこれから改善すればいいのさ！」

それに...見てごらんよ...彼ら、すつごくカッコいいぜ!!」

見るとグラウンド・β入り口から思い思いのスーツに身を包んだヒーローの有精卵たちが続々と姿を現した

「...!!」

「フフツ...さあ始めようぜ...有精卵ども!!」